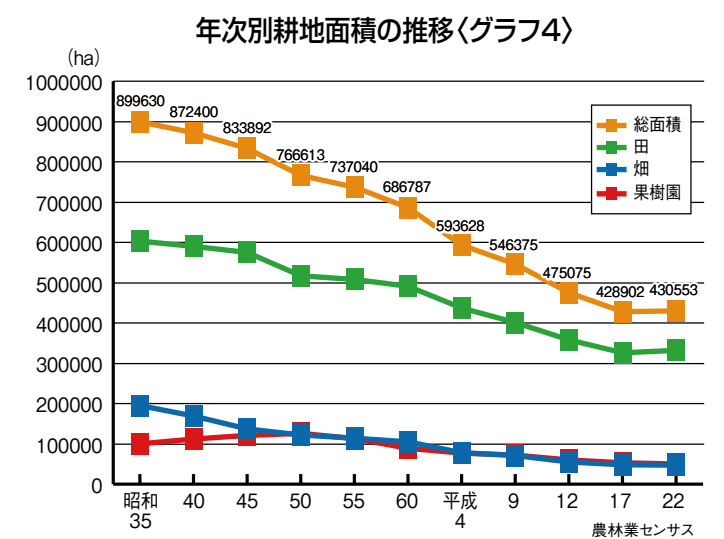
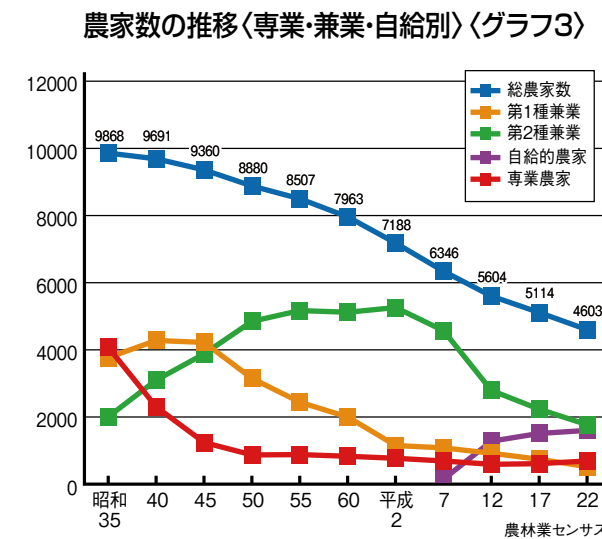
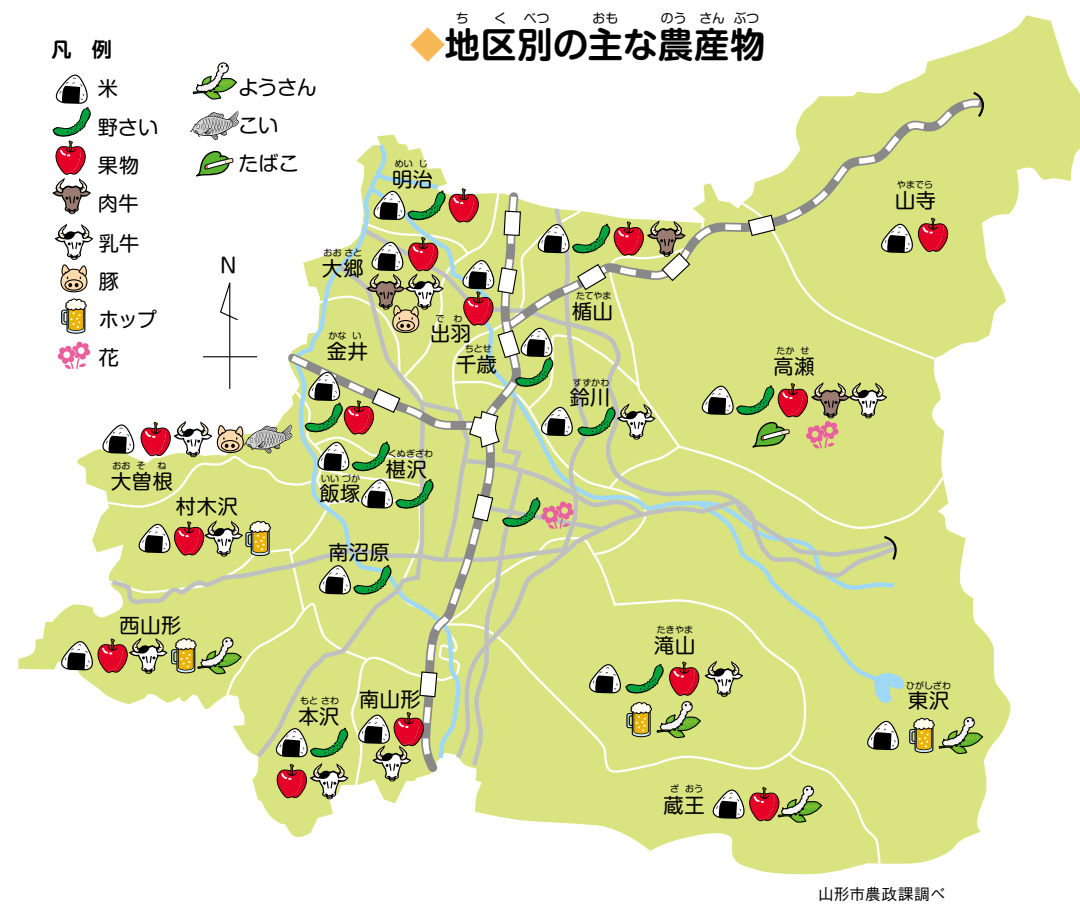
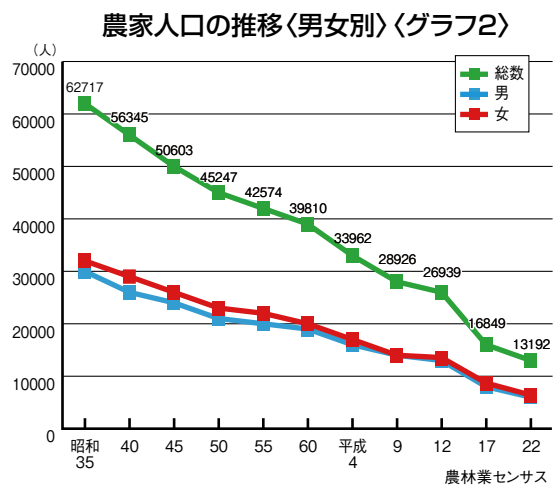
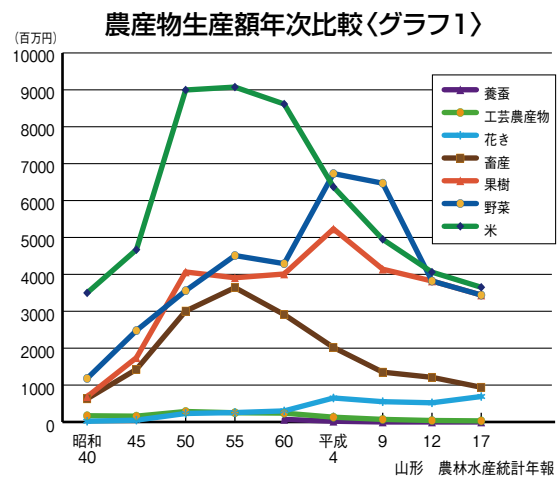




◆主な農産物の収穫時期

| 品名            | 1月 | 2月 | 3月  | 4月  | 5月  | 6月  | 7月  | 8月  | 9月  | 10月 | 11月 | 12月 |
|---------------|----|----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|
| 米 (おにぎり)      |    |    |     |     |     |     |     |     |     | 最盛期 | 最盛期 |     |
| きゅうり (きゅうり)   |    |    | 収穫期 | 収穫期 | 収穫期 | 最盛期 | 最盛期 | 最盛期 | 最盛期 | 最盛期 | 最盛期 |     |
| トマト (トマト)     |    |    |     | 収穫期 | 最盛期 | 最盛期 | 最盛期 | 最盛期 | 最盛期 | 最盛期 | 最盛期 |     |
| なす (なす)       |    |    |     |     | 収穫期 | 最盛期 | 最盛期 | 最盛期 | 最盛期 | 最盛期 |     |     |
| 白菜 (白菜)       |    |    |     |     |     |     |     |     |     | 最盛期 | 最盛期 |     |
| 食用菊 (食用菊)     |    |    |     |     |     |     |     |     |     | 最盛期 | 最盛期 |     |
| さといも (さといも)   |    |    |     |     |     |     |     |     | 最盛期 | 最盛期 | 最盛期 |     |
| さくらんぼ (さくらんぼ) |    |    |     |     |     | 最盛期 | 最盛期 |     |     |     |     |     |
| りんご (りんご)     |    |    |     |     |     |     |     |     | 最盛期 | 最盛期 | 最盛期 |     |

〈JA等の資料による〉

**1** みどろ 水土里に生きる

## 稲作が中心

グラフ1の農産物生産額年次比較を見ると、最も多いのは稲作です。平地のどの地区にもみられ、遠い昔から耕地と水利管理に工

畑作は、きゅうりやトマト、白菜、なすなどの野菜類と、りんごやぶどう、サクランボなどの果物類です。一般の野菜畑は同じ畑で年に2～3種類の作物を育て収益を上げています。千歳、楯山、金井、大郷、明治、本沢地区などの市街地周辺で盛んです。

また近年は、花苗や、ベニバナ、啓翁桜などの栽培農家が増えています。乳牛は山寺・高瀬・滝山・大曾根・村木沢地区で、錦鯉は大曾根地区の常明寺、ヒメマスは新山・関沢・蔵王温泉で川を利用して育てられています。

## 地域により違い

地区別農産物地図をみると、育てている農産物は地域によって違いがあります。それはそれぞれの作物栽培に適する地形や土

壤、気候、用水路などの条件が大きく関わるからです。作物の品種改良や肥料・消毒などの栽培技術も年々高まっていますが、地域の特性を生かしたベニバナや啓翁桜などの特産地づくりも大事なことです。

## 農家人口と耕作地が減少

**農家人口と耕作地が減少**

兼業農家等を含めた農家人口と農家数の推移（グラフ2・3）をみると、昭和35年には62,717人、9,868の農家がありましたが、平成22年には13,192人、4,603と減少しています。特に4,077の専業農家がわずか692になり、83%の減少です。全国各地と同じように農業離れが急速に進みました。

それ故耕地面積の推移（グラフ４）では、田と畑、果樹園を合わせた総面積は昭和35年の899,630haから平成22年には430,553haへと52.2%も減少してしまいました。これまでの旧市街地周辺の田畑が、P12の市街地の変遷地図が示すように、新しい住宅地や工業団地、商業地域、道路などに変わったのです。

## 豊かな自然を生かして

**豊かな自然を生かして** 農業は、私たちの食生活を支え、国民の食糧自給率を保つとても重要な仕事で、田畑は人間に優しい自然環境を守っています。心ある農家の方々は、J A（農業協同組合）や行政関係者らと一緒に、山形の豊かな自然（水・土・太陽）と風土（里）を生かした安全・安心でおいしい食べ物づくりに工夫努力し、貴重な食糧基地を守ろうと励んでいます。

## 農業用水で発電 —南館小水力発電

馬見ヶ崎川の水は、農業用水だけでなく水力発電にも利用されています。「国営最上川中流農業水利事業」により造成された妙見寺の合口頭首工から取水し、国道286号地下のパイプライン6.5kmを通して、南館の調整池まで落下します。そして西方の田畑が潤されています。

しかし、山形市は扇状地であり、扇頂地にある妙見寺の「馬見ヶ崎川合口頭首工」と扇端地にある南館「小水力発電所」では106mもの標高差があります。農業用水としては水圧が高いので、そのまま田畑に流すことはできません。

そこで「最上川中流土地改良区」では、この水圧を利用する小水力発電所を昭和60年に建設しました。発電量は小さいですが、電気を庁舎内で活用し、余った電気は東北電力（株）に売っています。農業用水を活用した小水力発電所は、全国でも珍しく注目されています。それはこのような小水力発電は、「東北地方・太平洋沖地震」での電力不足の教訓を受けて、エネルギー確保の重要な施設として価値があり、見直されているからです。

このように、農業用水施設を活用した水力発電所が街なかにあることは、農業が盛んな山形らしい施設のひとつと言えます。



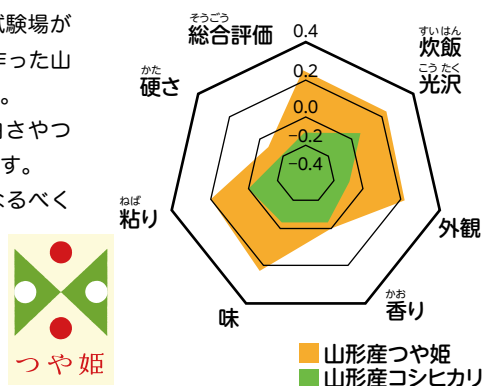
① 最上川中流土地改良区（右）と小水力発電所（左）

## 山形のブランド米「つや姫」のおいしさ

つや姫は、県農業試験場が10年の歳月をかけて作った山形産のブランド米です。

甘みの味、粘り、白さやつやの外観などが評判です。

農業や化学肥料をなるべく使わないで一定の条件を得て、認定された人たちが栽培できません。



## 最上川中流農業水利事業のあらまし(地図1)



## 水は最上川から

昔から今日まで米や野菜・果物作りが盛んに行なわれているのは、山形五堰や用水路整備、ほ場整理などのおかげです。現在は、「国営最上川中流農業水利事業」と「県営かんがい排水事業」によって造られた用水路と昔からの堰が、広範囲の受益地のすみずみまで行き渡っています。

この水利の約70%は最上川からで、その他は馬見ヶ崎川、本沢川、後明沢川、西山の畑谷大沼などです。最上川の水は、1987（昭和56）年に朝日町四ノ沢から山辺町根際まで出羽丘陵9.1kmのトンネルを通り、山形盆地に初めて通水されました。また馬見ヶ崎川の水は、これまでの山形五堰の他に、新たに妙見寺から南館まで国道286号の地下を用水管（パイプライン）で引いています（地図1）。

これらは飯沢にある「最上川中流土地改良区」が管理し、山形盆地の農地を潤しています。これらの水利事業のおかげで、ひでのりの時の農民同士の「水争い」もなくなり、長年の念願であった水不足が解消されました。なお西方に須川が流れていますが、酸性が強いために農業用水として利用できなかったのです。

## 進む品種改良

稲作農家の仕事は、「八十八（米）回」と言われています。これまでおいしい米づくりに向けて、4月の苗育てから9月の稲刈りまでに土作りや田の水量調節、草取り、肥料・農薬散布、水路整備、品種改良などに工夫努力しています。

品種改良により、病気に強い「陸羽132号」や収量の多い「でわみのり」から、味が良くおいしい「サ

サニシキ」「はなの舞」そして今日では「つや姫」に進化しています。

## みどりのダム

田んぼに蓄えられた水は「みどりのダム」と言われ、大雨時の洪水調整や、地域の地下水を潤す資源として、また夏には高い気温を下げる働きをしています。更に、水辺に住む動植物のすみかとして、人にやさしい豊かな自然環境の源です。

そして、黄緑から緑・黄金色へ変わる田園風景やおいしい野菜と果物がとれる山形盆地は、美しい景観と共に私たちの心にしっかりと刻み込まれています。



① JA「ごはん・お米とわたし 図画コンクール」（平成24年）  
農林水産大臣賞 図画3部 「うまくなれ」  
山形市立第九中学校 志田 葉月さん